婦人と子ども

第五卷第六號

蠶豆と赤石とのお話

やまとの翁

暖い春の朝のこと、裏の畑で、小さな話し聲がして居ます。一人は蠶豆で、も一人は小さな赤石です。何をいってるかと聞いて居ますと、こんなお話でした。

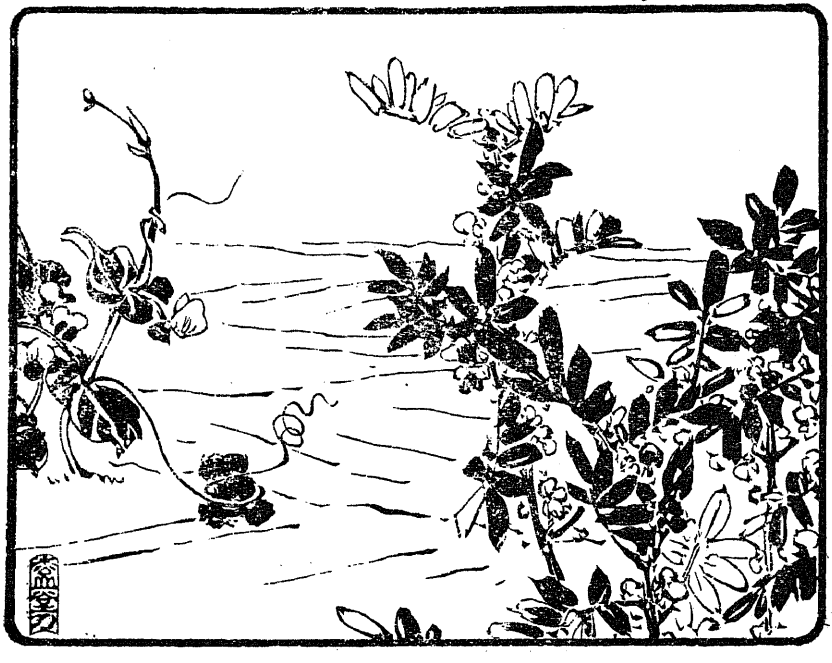
「こう見えても、僕は世の中に立って、する事があるよ」

豆が小さい聲で言ひますと、赤石は、吃驚した樣な聲で

「ぢゃ、君は何が出來ると言ふんです」？

と問うて居る。豆は

「さうさ、僕は生長くなることが出來るんだ。僕は豆だらう。だから、春になると生長くなるに決つて居るさ」



「へえー、其生長くなるってのは、一體どういふことなんです」？
如何にも理解らないといふ樣な句調で、赤石が尋ねます。
「おや〳〵、君は生長くなるってことを知らないの？、僕は、是位なことは、誰だって知らぬものはあるまいと思ってた。ぢゃ！いって上げよう。まづこうさ。第一番に僕の根が土の中に這入って行く、これは、水を飲む爲だよ、それから僕の莖は空に伸び上って行くが、これは温まる爲めだ。濕氣と温熱とは、まあ僕の食物といふ譯さ。
そんな具合で以て、だん〳〵大きな植物になるんだが、さあそうなると美事なもんだよ。ねえ君　地面の中では根が、そこからこゝへと這ひ込んで行くし、空では莖が四方八方に枝や葉を擴げる、

そこで僕毎日面白い物など見たり聞いたりするんだ、あゝ何だか、其時のことが、今から待ち遠くって待ち遠くって仕様がないなあ」

赤石は怪訝な顔付をして

「君の言ってることは隨分奇態じゃないか、其證據は僕は、今までこの一つ所に、何年といって居るのだが、ちっとも生長くならないよ、僕には根もなければ莖もない、あるんかも知れぬが、君のいふ樣に、上向ひたり、下向ひたりして動き廻はるなんていふことはない樣だ、君間違ぢゃありますまいな!?

「大丈夫、間違ふもんか、實際僕は自分でも生長くなる樣な心地がするもの、夫に、大分水氣を取ったから、もう直始めるよ」

話してる中に、豆の皮が端からパッと二っに割れました。赤石は

吃驚して見て居ますと、豆は、皮の中から割れて出た二つの袋の様なものを出して見せて

「赤石君、この二つはね、子葉といつて、そら僕が初めて根を下しかけた時分に見える、二葉なんだよ、こん中に僕の食物があつて、夫で以て僕が生長くなるんだ。尤も、僕の葉が大分生長くなつてくると、もうこんなものは要らないから、そうなると、この二葉は枯れて仕舞ふ。君、もっとづっと倚つて二葉の中を見給へそら眞中に小さな心が居るだらう、これが芽なんだよ、半分が根になって、半分が莖になる、ね君、分ったか？

「なる程、小さな白い塊が居る様だな、けども、そんなものが、根や莖になるなんてなことは、僕にはさっぱり合點が行かない」

「ハハー、石なんてものは、どこまでも可愛相なもんだな、して見ると、僕等の生長くなることが、どんなに面白いかといふことも、君には分るまい、僕は石なんかになって居るのは嫌なことった、年から年中一っ所に居てさ、そしてじっとして何もしないで居るんだもの、夫よりか僕は日向に枝でも擴げて、暖い甘い春の空氣を葉で以て吸ひ込むんだ。」

「君の言ふことは丸で無茶苦茶ぢゃないか、僕にはさっぱり分らないもの」

其中に豆の方は石に搆はず、づん〳〵伸びて行きました。そして丁度今の先豆の言った樣に、根は地面の中にぐい〳〵と押し込んで行って、しきりと水っ氣を吸ひ込むと、やがて、此水氣が莖の

方へ廻って行くので莖は生々と空向ひて伸びて行って、うね〳〵とした蔓の手は、ピシヤリと赤石を抱きこんで仕舞ひました。そして枝一面に白い花が咲き始めた。そして

「やあ、愉快だなあ」

といって居ると、赤石は、キヨロンとして

「へえー、君、成長きくなるってのは、この事ですか？僕はたゞ君が惡戯に言ってるのかと思ってた。なる程、立派だなあ君は」！

二人のお話はこれで濟むで仕舞ひましたが、夫から蠶豆は夏になって澤山な實がなり、其中に又莖は枯れて仕舞ひましたが、赤石は元の儘、生長くもならなければ、動きもせずに、依然として元の處に居りました、來年の春頃になったら、又同じ樣なお話が二

人の間に始まるかも知れません

（おしまひ）

一羽の烏が、咽喉が乾いて水を飲みたくってゐると、いゝ具合に水の入ってる瓶を見付けました。さて其瓶から水を飲まうとしましたが。困ったことには、半分もないと見えて嘴が屆かない。そこで、一寸考へて、近くから、石を一づゝくわへてきては、瓶の中にいれて居ますと、水がだん〳〵上の方に上ってきて、とう〳〵夫を飲むことができましたとさ